



おおかみおくらばと
むかし、大阪御蔵番をしていた武士に河野久という人がいました。

久は子どもの頃、蛙をつかまえては跳ぶまねをしてよく遊びました。

ある雨上がりの日、蛇が蛙を追っかけているところに出合いました。蛙は必死に岩の上から池の中に跳び込みました。身をくねらせて追っていた蛇の体は、一本の矢のようになって、池の中へ飛び込みました。蛙は、池の底深くもぐって逃げました。

失敗した蛇は、岩の陰にとくろを巻いて隠れてしまいました。蛇が見えなくなると、安心したかのように、蛙は岩場へ帰っていききました。隠れている蛇の上を飛んだ瞬間のことです。蛇は、真っ直ぐ立ちあがって蛙を啜えしていました。

久はびっくりしました。手も足もない蛇が、仙人のような凄い力を出すものだ。

久は成人すると、お父さんの跡を継いで武士になりました。

しかし、久は武士の暮らしが窮屈でいやでした。なんとか自由になりたいと考え、仙人になる決心をしました。犬鳴の山にこもり、仙人の修行をしました。毎日、命がけの修行が続きました。

食事は、木の実・草の根・きのこなどで、ときには松葉を食べ、仙術の力にしました。野山をかけまわっているうちに、多くの神さまや仏さまに出会うことができました。そして、仙人としての力をつけていきました。悪魔を懲らしめることもできるようになりました。

久は、さらに上級の仙人をめざして、山深い葛城山へ移りました。ところが飲み水がないので困りました。我慢して水を飲まない修行もしてみました。体が弱るばかりでした。

動物・植物など、すべての生きものが生きていくためには、水がなければだめだと、久は強く深く悟りました。久の頭の中は、水のことではいっぱいになっていました。そして、自分の力ではどうにもならないとわかった時、大和の国の吉野仙人に教えてもらった呪文を一心に唱えました。見開いた目から光を放ち、鋭く突き出した久の拳は、岩をまっ二つに割っていました。その岩の間から、冷たい水がコロコロと音をたてて湧き出したのです。

それが葛城山に残っている紫雲水だと言われている。――

このことがあって、久は気をよくして、ますます修行

に励むようになりました。

ある夏のことでした。久はささゆりのたくさん咲いている山の中で、瞑想をしていました。

しばらくして、冷たいものが頬に当たりました。気がついてみると、ささゆりの蜜を含んだ朝露が一滴、頬を伝って口の中へ。

ささゆりは、久の顔をのぞきこむようにして、囁きました。

「あなたは何のために修行をしているのですか。せっかく努力して身につけた仙術です。人のために何か役に立つことを考えたらどうですか。」

飛び起きた久は、その答えを探して全国を飛び回りました。讃岐の金毘羅、安芸の宮島、成田の不動さん、今日は出雲の大社へと。

わずかな時間で飛行して帰ってきては人々を驚かせました。そして、行ったところで見聞きしたことを村の人たちに教えてあげました。水や土にもいろいろ性質があって、育った作物に影響があるとか、水の色・匂い・味のの違いで、金が採れる山だとか、銀が多く含まれているなどと、たくさん役に立つ土産話を、村の人に聞かせました。

ある年のことでした。長い間日照りが続き、雨が降らず、土地がからからに乾いた時がありました。沼も川も水が枯れて、田畑の作物も育たない天気が続きました。久は、葛城山の天辺にある八大龍王の社の前に座りこみました。神に雨乞いの願をかけ、断食に入ったのです。

「どうか私の願いを聞いてください。雨が降らないので、飲む水に困っています。田植えもできていません。

牛や馬まで痩せ細っています。どうか私に雲をよび、雨を降らせる術をお授けください。」

一滴の水も飲まず、眠らず、一心に祈り続けました。七日目の朝のことです。明けの明星がしきりに瞬きをして、眠りに陥ろうとする久を起こしました。龍王が社から現れ、久のそばに近よって、

「よくやった。よくがんばった。おまえの願いはよくわかった。この瓢箪を持って、その前の雲に乗って水がなくて困っている村々へ飛んで行くがよい。そして、この瓢箪の水を一つの村に一滴ずつ落とすとしてやるがよい。一滴の水も大切に。間違いのないように。」
と、慈しみの笑みを浮かべ、龍王は社の中へ消えていきました。

久は、瓢箪を押し頂いてなんどもなんどもお礼を言いました。そして、よろよろする体で紫雲水を両手にすく

い上げ飲みほすと、雲に乗りました。

日照りで困っている村々を廻って、瓢箪の水を落とすていきました。瓢箪から出る一滴の水は、美しい雨に変わって草木をよみがえらせ、田に水が入り、川の魚も泳ぎだしました。

「雨が降ってきた。雨が降ってきた。」

「雨が降ってきたぞ。ありがたいこっちゃ。うれしいなあ。」

空を見上げて、大人も子どもも手を取り合って踊って喜びました。

久は、この様子を見て安心しました。うれしくて涙が溢れ出ました。修行は完成したのだと自分に言い聞かせ、自分をほめました。

いくつ村を廻ったことでしょうか。ふと気がつくとき、久は古里の上に来ていました。さっそく瓢箪の水を一滴落とししました。ひと滴の水が優しい雨に変わり、野山は生

きかえました。きれいな虹もかかりました。

あまりのすばらしい光景に、久はもう一滴おまけをしやりたくなりました。はやる手をしずめて、おまけの一滴を落としました。

すると、さあたいへん。雨は大粒になり、激しい音を立て大降りになりました。川は洪水となり、田畑は水没し、その上、家まで流されたのです。

「しまった。」

悲痛な叫びが、久の口について出ました。

しかし、久は洪水を止める仙術を身につけていません。なんとかしなければと、我を忘れ、

「南無、八大龍王、雨止めさせたまえ。」

と、叫びながら、両手を開いて荒れ狂う水の中へ飛び込んでいきました。